

---

# 変人？新人？貸しと借り

隗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変人？新人？貸しと借り

### 【Nコード】

N1093J

### 【作者名】

隗

### 【あらすじ】

世界を股に掛ける強盗団、幻影旅団の新人、シズク。フェイタンと共に切り抜けた初仕事、古書の強奪。ヨークシン地下競売の少し前のお話

(前書き)

これは幻影旅団のシズクとフェイタンにスポットを当てた夢小説です。原作とは一切関係がありません。ゆえにのちに新事実などが発覚した場合矛盾が生じるかもしれません。ご了承ください

よく晴れた青空が私の頭上いっぱい広がっている。血に濡れた私という存在さえも包み込む広大な空だ。私は止まっている車のフロントガラスの前に立った。

長ズボンに濃い紫色の上着、もともと大きい目を納めるさらに大きい黒縁めがね。

どこにでもいる普通の女の子がそこに映っている。いや、どちらかっていうと教会とかにいるシスターに近いかもしれない。

私はとりあえず服装に問題がないか確認すると少しだけ上着を持ち上げて腹部をみる。そこには8の数字が刻まれた蜘蛛の刺青があった。

本当に入団したのね

今まで湧かなかった実感が確かに体中をめぐるのを感じた。数字の刻まれた蜘蛛の刺青：それは世界を股にかけるA級賞金首の強盗団、幻影旅団の証。もう私に後戻りはできないのだ。

「そろそろ時間だし行こうかな」

今日は初仕事。この町の図書館にある念について書かれた古書の強奪だ。ちなみに念っていうのは人間に宿る生命エネルギーでさまざまなことに使える便利な力のこと。

でも私は仕事内容にはたいして興味がなかった。一番の目的はほ

かの団員達との面会。入団するときは団長…確かクロロルシルフルっていったつけ？ともかくその人とか会ってないから団員がどんな人なのかまったく知らない。だから仲間と会える今日をずっと待っていたのだ。変な人だったらいやだな、というわがままを抱えながら。

私はゆっくり歩を進めていく。できるだけ不自然にならないように。

- 2時間後 -

「で、そんなにきちりしてて何故一時間も遅刻するね？」

「すみません。ちょっと道に迷っちゃって」

「地図渡してあるのに迷たのか？」

「うん。でも私この地図の通りに来たんだけど…」

そう私は地図通りに来たはずなのだが一時間も遅れて着いたのだ。どこで間違えたんだろう？私は仕方がないから地図を目の前の団員らしき人に渡して必死に弁明する。

「…お前この通りにきたあるか？」

「そうだけど、何？」

「……………これ、地図逆さまね。何故気づかない？」

「だって団長に渡されたまま持ってきたから」

「地図も読めないのか！？団長命令絶対あるけどどこまで守る必要ないね！！天然！？眼鏡かけてるから天然！？そんな古典的すぎる分かりやすいキャラあるか！？」

「キャラ？なにそれ。私天然じゃないし。しかもなんで私団長から受取ったままの状態で地図使っていたの？」

私は素直に疑問を口にしたただけだったが目の前の口元をマスクで覆った小男は呆れかえり「もういいね」とずっと連呼していた。なんでだろう？

「…じゃあお前なんていう名前ね。私はフェイタンね」

「シズク。団員ナンバー8。シズクです」

「シズク、話しているといつまでたても進まないから単刀直入に言うね。一時間も遅れたから作戦を今すぐ開始するね。今、大図書館にはシャルナークとフィinksという人たちが先に待機してるよ。二人は外から誰も入れないようにしてくれてるから私たちは中に入て地下の金庫室の古書を盗るね。見つけた人間は一人残さず殺すよ。分かたあるか？」

「了解」

こうして私の初仕事はよくわからないまま始まった。

「シズクか。よろしく。俺の名前はシャルナーク。シャルって呼んでくれ。こっちはフィinks。」

「よろしくな。」

フェイタンが先にしっていたほうがトラブルが起きない、といていたのでその二人に会ってみた。予想通りすごい念能力者だ。基本的な体術も念も私の知る人間の領域を大きく超えている。私もたくさんの能力者を葬ってきたけどこれほどの人間に出会ったことはなかった。

「フィックス、こいつ天然ね。気をつけるよ。間違えて攻撃されかねないあるから」

「大丈夫だ。女はいい男は狙わないから」

「そうあるか。じゃあフィックスは狙われるね。私は大丈夫よ」

「そうかよ。まあ遊びは近くらいにしておいて、シャル説明を頼む」

・・・今、何事もなかったようにしてたけどフィックス、フェイタンに八発くらいパンチ打ってたよね？すごい速さ。フェイタンはフェイタンでラクラクそれをよけてたし。

「はあ」

思わず私はため息をついた。圧倒的なレベル差に絶望感さえ感じただからだ。

「どうしたの？」

「えっ、ああ大丈夫。私かなり弱いんだなあって思っただけ。」

「大丈夫ね。この仕事やればすぐに追いつくね。シャルナーク、続けてよ」

「うん。フエイタンの言うとおり。大丈夫だよシズク。じゃあつづけるよ。聞いている通り俺たちが外を防衛する。二人は仕事が終わったらずくに電話で連絡してくれ。目的の古書は地下一階の大金庫にしまつてある。ただ少し問題があつてね、ここの警備員、ほとんどが念能力者なんだ。」

さらつと驚愕の事実をいつてのけるシャルに私は驚いた。念能力が誰にでも備わつているとはいえ使いこなせる人間は一パーセントでいどしかない。だからこそ、念能力者と一般人の間には圧倒的実力差があるのだ。

しかし心配している私とは対照的にフエイタンは笑っていた。背筋が凍るような残忍な笑みを浮かべながら。

「そうあるか。だったら楽しみね。こここのところ強い奴を斬てなくて腕がなまてるよ。いいウォーミングアップね」

「おいおい、くれぐれも殺しておしまいにするなよ。ちゃんと盗んでから帰つてこい」

「じゃあ行くよ。作戦開始！」

この時点ではつきりした。やっぱこの人たち全員変！！

実際警備兵は大した強さじゃなかった。確かに念は使えているけど私が今まで戦ってきた相手よりはるかに弱い。

私は念で具現化した生きる掃除機、デメちゃんを使って一人ひとり撲殺していった。一方フェイタンのほうは能力を見せる気配もなく念で強化された刀で次々に首を切り落としていった。その足元には紅蓮の薔薇が幾重にも咲き乱れている。

「シズク、お前ボーとしてるくせに冷静に人殺すね。イメージとの差が大きすぎるよ」

「そう？私仕事しているだけだけど。なんか駄目だった？」

「いやいいある。もう面倒ね」

こんな感じでとりあえず蹴散らして行ったらいつの間にか地下一階に到達した。

「ここをこうして・・・開いたね」

さすが強盗というべきかな。すさまじい手際の良さでたやすく金庫を開けて古書を持ち出した。これで仕事は終了だ。私は何にもやってないのに。

少し詰まんなくなり幻影旅団もこの程度の面白さか。そう思った。しかしその時だった。背後から鋭い念の矢が飛んできたのは。私はいきなりの奇襲で驚き跳躍してそれらを交わす。

「シズク後ろね！」

「えっ？」

フエイタンの声で振り向くとそこには私の心臓めがけて飛んでくる四本の矢があった。さつきと同じ矢・・・これなら一直線にしか飛んでこない。フエイタンに感謝しつつ全力で体をよじり、念の防御を最大限にして防ぐがその時あり得ないことが起きた。矢が体に触れた瞬間念の防御が一気に薄くなったのだ。四本の矢は私の左肩、脇腹、左手、胸を貫く。

「ぐっ・・・！」

さすがにこれはきついな。念を弱体化させる貫通力に富んだ矢。周りを見てみると20人近くの警備員がいた。明らかにさつきの奴らとは格が違う。しかも彼らは全員再び矢を練っていた。

ああこんどこそ終わったな。もう体は空中で動かすことはできないし・・・

仕事を甘く見ていた自分が恥ずかしくなり、また後悔さえも湧いてきて私は眼を閉じた。そしてその時はきた。20本もの矢が飛んでくる。全方向から飛んできているわけじゃないから同士うちは期待できないし・・・

グサッ！！

「何故あきらめるね？こいつら・・・みんなザコ。旅団に入たなら死ぬまで戦い抜くあるよ」

完全に死を覚悟していた私の目の前にいたのは血まみれのフエイタンだった。刀で防ぎきれなかった九本の矢が本来なら致命傷にな

りうるであろう場所に深々と刺さっている。しかしそれでも彼は冷静だった。すぐに刀を投げ一人を斬り殺す。

「これは貸しね、シズク。私の力は周りの人間を巻き込むね。古書を持って早く逃げるよ」

「でも・・・それじゃあ・・・フェイタンが・・・」

なにをいつているの？この人数相手に勝てるわけなのに・・・

「なにボーとしてるね早く！」

次の瞬間私の体は宙に舞った。フェイタンに突き飛ばされたのだ。戻ろうとする私を彼の眼光が射抜く。「行け」そうその眼は語っていた。私は古書を抱えて走りだした。彼の無事を祈りながら・・・

- フェイタン視点 -

「仲間を逃がして自分は死ぬか。いい心がけだな。だが無駄だ。あの女も我々が始末する。」

「私が死ぬ？笑わせるね。新人育成も苦労するよ。こんな奴らに力使わなくちゃいけないあるから」

一人ひとり殺してもいいが面倒なのであれを使うことにする。受けた痛みを相手に返すカウンタータイプの念能力。

「な・・・なんだ、いつの間にか鎧をまとった！？みなもの、かまうな、撃て！撃つんだ」

ワタシの具現化したよろいを見て全員が構える。でももう遅いね。もう発動したよ。

「痛みを返すぜ。お前らごときのザコがこれを見ることができると、光栄に思いながら死ぬといいね!!」

ペインバッカー  
許されざるもの

先ほどの念の矢で受けたダメージの分オーラが熱に変わる。それはすぐに炎を呼びすべてを焼き尽くした・・・

「どうしたね、シズク」

懐かしい思い出に浸っていた私にフェイタンが話しかけてくる。

「ちょっとであった日のことを思い出してただけ」

「あのときはシズクがあまりにも弱くて大変だったよ」

「ひどいなあ。でももう大丈夫。あの時の借り、返せるく

らい強くなったから」

そう、もう大丈夫。今日のヨークシンでの仕事では絶対に足を引  
っ張らない。だってあなたにもらった幸運が付いているから

変人も悪くない・・・だからあなたといえるのも悪くない

ヨークシンシティ 地下競売襲撃の少し前の話・・・

(後書き)

表現力が乏しくてすみません。これから腕を磨いていく予定なので大目に見てやってください。最後まで読んでくださりありがとうございます。ございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1093j/>

---

変人？新人？貸しと借り

2010年11月13日17時19分発行